慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済価値論（一）
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1918
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.12, No.11 (1918. 11) ,p.1587(101)- 1598(112)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19181101-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大觀せること、彼が「雅典の收入」中に表明せる諸計畫の實行可能なるを毫も疑ふことなかりしに徵して明かなる可し。而も彼が產業の社會化に關する近代的學說を主張するに當り、倫理的又は政治的見地よりせずして之を經濟的理由に求めたるは、彼が Platon 及び Aristoteles を超出して近代社會主義者に迫りつゝあるを思はしむるものあるなり（同 iii, iv.）。

然れども是に對する彼の經濟的論據は毫も庶民の幸福と交涉有るに非ず。何となれば彼の提案に從へば、庶民は悉く奴隸たる可き運命を有するものにして、固より彼等に十分なる政治上の諸權利を與ふることを拒みて、雅典の放漫なる民主主義に反對し（Ath. Pol.）、貧窮なる市民及び外人と雖、之を鑛坑に使役せんとせず、却て雅典市民一人に對し三人の割合を以て奴隸を公有し、以て國家の收入を擧ぐ可しと主張せるなり（Rev. iv. 17.）。彼は單に市民の間に於ける貧困を絕滅せんと欲したるのみ（同 33.）。彼は國家が幾多の產業に於て其經營者たる可きを欲したり。國有商船（同 iii. 14.）、奴隸の公有（同 iv. 17.）、鑛坑の公經營（鑛坑は當時既に大部分公有たりしも、而も私人の經營に屬せり）（同 iv.）、鑛坑附近に移住する者に對して賃貸せらる可き公有家屋（同 49.）等は總て其計畫に屬するものなり。富者は這般の企圖に對して出捐せざるを得ざるも、而も其利子として出資額の一割八分、三割五分乃至二十割の利得を得可し（同 iii. 9-11.）。而して鑛業に於ける個人企業の危險を除去するが爲には會社を組織せしむるを得可く、而して是等私企業者の會社と公企業のそれとの間には何等利益の衝突なきのみか、却て鑛業に從事する者多きに從ひ其利得を大ならしむるを得可しと做せり（同 iv. 30-32.）。斯くて貧困は其跡を絕ち、共同の資源に依りて全市民悉く十分なる滿足を得、而して國家に取り繁榮と安定との時代を齎すに至る可し（同 iv. 33, 49-52, vi. 1.）。要之、彼の主張は私有資本は單に其所有者一個の富裕を來すに過ぎざるに反し、國有資本は全市民をして洽く富裕ならしむる上に於て更に多大なる利益を擧ぐるを得可しと云ふに在るものなり（同 iv. 14. 其他）。

從て Xenophon は國家の人口を制限するの必要を見ず、寧ろ其增加を以て彼が計畫の結果として生ず可き利益の一と做し、都市は是に由りて旋て人口頗る稠密と爲り、而して鑛山附近の地は幾許ならずして雅典附近に於ける土地と等しく高價なるに至る可しと主張せるなり（Rev. iv. 50.）。

本稿は專ら Rev. J. S. Watson 譯 Xenophon's Works 並に W (alter) M (oyle) 譯 A Discourse upon Improving the Revenue of the State of Athens. に據り、尙最も重要なる指導と資料とを Albert Augustus Trever の A History of Greek Economic Thought. より得たるものなり。（十月十八日）

經濟價値論（一）

野村兼太郎

經濟學は價値選擇を基本とする文化科學の一として其根本概念が價値論にあることは論ずるまでもない。然るに斯く中心的重要なる概念なるにも拘らず、其價値論たるや紛糾錯雜し其歸趣をすら見出し得ない。遠くは Platon, Heraklit, Xenophon. の昔より近くは Neuman, Marx, Böhm-Bawerk の今に至まで、幾多の學者論客に依つて攻究せられ、而も充分なる解決を與へられないで居る。然らば何故に斯く紛糾するのであらうか？　そも〳〵價値論の根本は何か？

此一小論文に於て、此千古の大問題をすべて解決しやうと云ふのでは素よりない。又如斯容易に解決し得らるゝものとも思つて居ない。併乍ら余は常にあらゆる經濟問題に先立つて、經濟學は果して獨立せる科學たり得るや否やの問題の解決を求めやうと欲して居る。若し科學たり得るとせば其獨自の研究範圍は如何。其方法は如何。更にそは自然科學 Natur wissenschaft であるか、或は又文化科學 Kultur wissenschaft であるか。而してその哲學的根據は如何。余は從來此等の問題に不審を起し其根本的解決を欲して居た。其思索の結果は未だ明なるものではないけれども、余は經濟學は一の文化科學（Rickert とは稍々異りた意味の）として其獨特の研究範圍を有せるものと思惟するに至つた。而して終に其根本概念たる價値論に思ひ至つて、秘に從來の經濟價値論に對して飽き足らぬ感を抱いて居た。認識論を根據とせざる價値論、根本を閑却して末葉をのみ論ずる從來の價値論に對して不服なきを得ない。余は余の思惟する價値論が完全なるものとは信じて居ない。併し從來の余の思索の結果として少くとも論理上正當であると信ずる。

要するに余が從來思考し讀書し來たれる結果の一部を陳述して、諸先覺の叱正を仰がうと欲するのみである。

一

經濟學が一方人間の實際經驗を基礎とするものである以上、其價値論は常に當時の社會思想から離れて考ることは出來ない。それと共に他方人間思惟の所產であるからには、當時の哲學思潮より離れて考へることは不可能である。價値問題の全歷史を通觀する時は、明に當時の哲學思想及び社會思想を背景として居ることが解

る。余は價値說を眞に理解せんには此等の思想をも合せ知る必要があると思ふ。

昔より現在に至る迄幾多の學說が存在し互に論難せるは前述の如くなるが、尙其間互に比較し考察する時は自ら向はんとする一方向が存する。即ち現在に於ては所謂主觀的價値論に傾くものである。

此傾向の深き根源は何であらうか？

余を以て見れば價値問題も亦かの歷史上の二傾向、即ち希臘思潮 Hellenism. と基督敎的精神との二大潮流に伴隨するものゝやうに思はれる。勿論三千餘年の歐洲文明は多樣多端の要素から成立して居るから、直ちに此二つの思想のみを以て社會全般の現象を斷定するのは甚だ危險である。又價値問題自身に就ても同時代に必ず同一主張のみ存在する譯ではない。反對の學說も主張される。併し乍ら大體に於て斯く二大思潮が互に起伏し、價値問題も大體此傾向に依て一定の方向に向ふと云つても差閊無いと思ふ

希臘思潮は人間らしき人間を重んじ自己を尊重するの念強く現世を讃美し主觀的である。之に反して基督敎的精神は人間よりも神、人間性より靈性を尊び犧牲的氣風強く、來世を賴み客觀的である。希臘の神々である Jupiter や Juno と猶太の人の子たるクリストとを比較せばよく其對象を知り得るであらう。前者の神の何ぞ人間味を帶び、後者の人の子の何ぞ靈的神性に富める。然るに現在に於てはかの十五世紀に其端を發した Renaissance 以後人間の大自覺を惹起し、Luther の宗敎改革、佛蘭西革命、其他十九世紀の諸變動、及び二十世紀の現在の事業相次で、次第にかの希臘思潮の復活勝利となつた。

これ價値問題の解決を求むるに主觀的彩色を強くし限界的效用說の益々勢力を得た所以ではあ

るまいか。

以下理論的叙述に入るに先立つて現在の問題を離れて、極めて簡單なる歴史的考察(1)をなし當時の社會及び哲學思想と價値問題との關係が如何に密接なるかを明にしたいと思ふ。(2)

註一、歴史的叙述に關して參考とし重なる著書は左の如し。

Trever:— A History of Greek Economic Thought.
Kaulla, R.— Die Geschichtliche Entwicklung der Modernen Werttheorien.
Ingram;— A History of Political Economy.
Bonar, J:— Philosophy and Political Economy.
Sewall, H. R:— The Theory of Value before Adam Smith. (Pub. of the Amer. Econ. Assoc. 1901.)

等である。以上の内 Kaulla の著書に負ふ所最も多い。

註二、經濟學が文化科學の一つである以上、其理論的研究には常に歴史的研究を必要とする。何となれば其科學の對象たる文化は單に現在の狀態のみにあらずして、過去の歴史の累積であるからである。尚此事に關しては後に於て詳論する。

希臘時代にすでに純然たる經濟學說ありとするは元より牽强附會の誹を免れない。彼等の經濟思想と云ふべきものは頗る單純にして公私の經濟（Private and Public economy）の混淆は勿論、倫理問題政策問題と經濟純理との區別すら存して居なかつた(1)。併し乍ら此種の混淆を敢てする學者が現在に於てすら、ないとは云はれない。まして吾人は彼等の經濟學說を論じやうとするのではない。彼等の事物に對する經濟的價値判斷を見さへすればそれでいゝのである。彼等が倫理著しくは宗敎等の思想と混同せる中に自ら經濟的判斷の存する以上、余は彼等の經濟的價値判斷を論し得ると信ずる。

併し此等の價値判斷を最も明確に示した者はかの Aristoteles(384-322. B. C.)である。財の交換價値 Tauschwert と使用價値 Gebrauchwert との概念を明に示したのは彼であつた。(2) 彼は客體の交換價値を人間の主觀の欲望感情から說明

した點より見れば、彼は主觀派の創始者である。併し彼は一方二つの財が同價値であるが爲には何か同一それ自身がその物の内にあることを必要とすると云つて居る。而して價値の客觀性を發生論的に分析することに其解決の途を求めて居る(3)。

註一、前掲Trever:— pp. 8.

註二、"Of everything which we possess there are two uses both belonging to the thing as such, but not in the same manner; for one is the proper and the other the improper or secondary use of it. For example,...." (Aristoteles:— "Politics. tr. by Jowett Sec. 9.)

註三、前掲 Kaulla:— S. 263

Aristoteles の巨星墜ちて以來約千五百年の間大小幾多の群星が現れたが、燦然たる巨星には遠く及ぶべくもなかつた。

希臘文明は亡びて其美點を棄てゝ羅典民族の本來性を加へてこゝに羅馬の文明は興つた。極端なる國家的利己主義。羅馬の市民を除いては他は人間にあらずと迄誇稱せる彼等は上には桀紂にも劣らぬ Nero の如き暴君を戴き同族相食み殘忍暴惡を極めて居た。かの猛獸をして奴隷罪人等を嚙殺させたと聞く大觀覽場も、彼等の殘忍を物語る名殘である。此等の狀況はすでに Gibbon の "Decline and Fall of the Roman Empire." Mommsen の "The History of Rome." 等に明細に記され、又かの Sienkiewicz の "Quo Vadis?" 「何處へ行く」となり Farrar の「闇と黎明」"Darkness and Dawn" となつてすでに人の知れる所である。此現世的快樂主義の反動となりてこゝに起つて來た思潮こそ前に述べたる基督敎的精神に外ならない。希臘哲學の代りに基督敎が思想界を支配し、異敎的 Wissen に代るに聖書（バイブル）的意味の Gereche となつた。人間味の勝つた生活から宗敎的生活に這入つて、かの利己的肉的な風俗は利他的禁欲的方面に移つ

て行つた。かゝる時代を背景とし、かゝる思想の激變に會へる當時の價値論は如何？

論ずる迄もなく其思潮と共に同一方向に變化する。羅馬の Jurisprudenz は價値判斷は正義に依らなければならないとした。"turpe lucrum sequitur qui minus emit ut plus vendat." "qui plus quam dedcrit accipit, usuras expelit." "rapinam facit qui usuram accipit."(1) 等の思想。賣惜みを禁じ獨占を排し不當利得を禁ずるの觀念はかの有名なる Justum pretium の概念に歸する(2)。正當なる價——Justum pretium を使用價値の基本となし、これより出發して日常の取引交換の價値判斷の標準としやうとした。こゝに至つて一の假定を必要とする。即ち人間の正しき欲望を抽象的に測定し得る典型的人物である。此 normal な人間の假定——換言すれば人間の主觀的要素を全く相等しいと見做し、こゝに始めて客觀的

なる Justum pretium の說を樹立することが出來る。即ちすべての主觀的欲望を與へられたる一定量と見なければならない。從つて主觀的欲望の變化を以つて直ちに價値變化の根源となす事は出來ない。必ず前に述べた客觀的の normal な欲望と見做してしもうのである。こゝに於て價値變化を說明せんには、何等か異つた方法を取らねばならぬ。

二個の財が同一の價を有し正しきものとして交換されるには、此等兩者の總費用額——委しく云へば勞働と費用(Arbeit und Kosten.)が全く等しくなければならない。かく客觀的に價値判斷を求めた最初の者は Albertus Magnus (1193-1280) である。若し Aristoteles を以つて人間の主觀的欲望に立脚せる主觀的價値說の創始者とするならば、Magnus は客體の本質 Beschaffenheit des Objekts を目標とせる客觀的價値說の創始者と云つても差閊ない(3)。

此見解はスコラ哲學の全盛時代には相當に勢力を有して居た。併し乍ら元來人間其ものゝ欲望は如斯一定の規矩に入れて考へ得らるゝものでない。加ふるに十三世紀以後漸く經濟狀態の進步に連れて其價値判斷も次第々々に複雜となり、日常取引交換の業務に於ても單なる抽象的の價値判斷にては到底よく論斷する事が出來なくなつた。此間の葛藤を解決せんとして努力したるをかの Thomas von Aquinus (1225 order 1227-1274) である(4)。

註一、前揭 Bonar:— P. 53 より孫引なり。

註二、現在に於て如斯思想換言すれば基督敎的思想の再び興らんとしつゝあるのではあるまいか一個の疑問として、こゝに附記して置く。

註三、前揭 Kaulla:— S. 53.

註四、廣田博士「トマス、ダキノの經濟學說」(改定經濟學研究坤卷、六三九—六七五頁) 參照。

Poverty, Humility, Celibacy の三つを此上もなき高德とせる Monasticism と、Property を欲し Liberty を渴望する人間本來の性質と相去ること餘りに甚しかつた。加ふるに科學的知識の發達は過去を尊重する觀念を漸次に打破し去つた。Roger Bacon (1214 ?-1294) に依つて稱へられた學問研究の三大方法、(一)現象そのものゝ精密なる觀察。(二)實驗。(三)科學的器具 Scientific apparatus. 等は神に對する信仰に代るに自然に對する窮理心を示すものに外ならない。こゝに於てか法皇併びに僧侶のみの獨占であつた宗敎も、もつと自由な非形式的なものに變らざるを得ない。國民の思潮の變化はあらゆる方面に其影響を及ぼす。當時の宗敎思想を最もよく語れるものはかの英吉利詩人 Alexander Pope (1688-1744)(5) の詩 "Universal Prayer" である。

Father of all! in every age,

In every clime adored,
By saint, by slave, and by sage,
Jehova, Jove, or Lord!
Thou great First Cause, least understood,
Who all my sense confined
To know but this, that Thou art good,
And that myself am blind;
Yet gave me, in this dark estate
To see the good from ill.
And, binding nature fast in fate,
Left free the human will.
*　*　*　*
What blessing thy free bounty gives,
Let me not cast away;
For God is paid when man recieves;
To enjoy is to obey.

斯の如く思想の變遷は理想論を離れて實際論に進んだ。同樣に價値論に於ても實際的に考究するやうになつた。人を人本來の性質あるがまゝに觀察すれば、各人の主觀的欲望なるものは決して一定不變のものではない。こゝに於てか異なつた立場に注目する學者を生ずるに至つた。Heinrich von Laugestein, は人間の欲望は各々其立場を異にするに從つて、其類の同じくないことに注意し、Buridan (1300-1358) は富者の欲望と貧者の欲望とは同一財に對しても其程度を異にし、從つて其價値判斷も明に異ることに注意した。彼は欲望滿足 Bedürfnis=befriedigung の差違の程度に其解決點を求めやうと試みた(1)。

若し同一物の價値判斷が人を異にする毎に一定しないとするならば客觀的なる生產費用のみを以て物を評價することは不可能である。何か之に代るべき合理的なる價値測定の尺度を求めなければならない。さもなければ極めて主觀的なる人間の欲望に其基礎を置かなければならない(3)。

以上述べた手段の外には唯是等兩者を折衷する方法があるばかりである。斯くて價値論の潮流も他のすべての社會的潮流と同じく、Renaissance の時期が到來したのである(4)。これ即ち中世紀の啓蒙思潮 Aufklärung である。

註一、The Poetical works of Alexander Pope. edited by Robert Carruthers. Book I. P. 368.

註二、前掲 Kaulla:— S. 57 ff.

註三、此の價値說に於ける主觀客觀兩派の論爭は最近にまで及んで居ることは後に述ぶる通りであるが、經濟學が純然たる客觀的になり得ざることを證する一端であると思ふ。即ち經濟學が嚴密なる自然科學例へば物理學等の如くなり得ざることを示すものである。これ即ち斯學が人間の關與する學問として、自然科學とは全然別個の方面に立脚する所以である。此事に關しては後に更に委しく述べる積りである。

註四、前掲 Kaulla:— S. 61.
及び Robinson & Beard:— Outlines of European History. Part II. PP. 21-26.

二

經濟價値說の Renaissance は Macchiavelli の實際的觀察に依つて影響されて起つた。Buridan の學說後二百年、伊太利フロレンスの人 Bernardo Davanzati-Bostichi. (1529-1606)(1) は全然實際的見地から一般の價値問題を研究した。當時未だ確然と主觀的價値說を主張する者無き間に、卒先之を說へて Geminiano Montanari, Nicholas Barbon 等の先驅者となつた。

併し乍ら未だ全然主觀派の勝利に歸した譯ではない。かのストア哲學の自然法權說 Naturrechtheorie は再び John Lock (1632-1704) を通じて現れて來た。Locke の哲學は永い間其時代を支配して居た。「若し吾人が其使用せんとするものを正しく評價し、其費用を純然たる自然に負ふ所のものに投ずるか、或は勞働に負ふ所のものに投ずるかと云ふに、そは百分の九十九迄

勞働のために投じられるのであらう」(2) とは Locke の言である。斯くして彼は勞働の分量に依つて價値の高下を定むる其勞働價値說を自然權的觀念の下に交換價値と結合せんとした。其交換價値――彼の所謂 Marketable value は一に市場に於ける需要供給の數量的關係を以て說いた(3)。

是等の理論の背景は即ちかの Merkantilisums である。當時の思潮のすべて表面的であつた如く、價値論に於ても需要供給の關係のみが價値を形成するものとして其價値を定むる眞の內的必然 innere Notwendigkeit を欠いて居た。政策の理論的完成のためには國民經濟發展の法則に問ふ所なく、唯經濟的生活に於ける Regierungswillkür に從つて形成された(4)。

Merkantilisums の思想。――需要供給の機械的作用に依つて價値を定めんとする思想。是等の思想を巧みに組織立てたのは英の James Steuart (1712-1780) である。又伊太利の Antonio Genovesi (1712-1769) は優れたる Merkantilisums の理論家であるが、彼は價値は財の效用性に直接比例し、財の稀少性に逆比例するとなして數學的形式に作り上げた。

是等の現實的意義に重きを置いた學說はスコラ學派の獨斷說に對抗して起つた Renaissance 時代の產物であるが、是等の學說は人間の理想的信仰を絕やすに預つて力があつた。前に述べたる如く一方 Nicholas Barbon (1640?-1698)(5) の如き抽象的欲望と具體的欲望との間に嚴然たる區別をなし主觀的價値論を稱ふる者あれば、他方には合理的經濟論者たる Sir William Petty (1623-1687) の如き客觀論者あり、混沌として其歸一する所を知らない。これ即ち Renaissance の生んだ弊害であつて、餘りに現實主義餘りに主智主義に傾いたゝめ、之に對する反感又は反動となつて峻嚴な利他的犧牲の精神が起つた當時の社會思想と軌を一にして居る。僧仰の復活。理想主義の再興。古き思想は新しき形を以つて其價値說に現るゝに至つた。獨逸に於て Samuel von Pufendorf (1632-1694)(6) は Protestant としてスコラ學派の思想を其根本に置いて復興時代の價値問題を論じた。又人道主義 Humanismus が希臘の自然權學說 griechischen Naturrechtslehre を復活した其影響の下に生じた學說は伊太利の人 Hugo Grotius (1583-1645) 及び其後繼者の價値論である。引いて十八世紀に於ける自由思想家たる Benjamin Franklin (1706-1790) の價値論もスコラ學派の新しき試みである(7)。

斯く主觀派客觀派併び存して互に論爭し遂には一方英吉利正統學派たる Smith, Ricardo, Mill 及び其價値論を繼承したる Karl Marx 等の客觀派價値說あると共に他方 Bentham, Jevons, K. Menger, Walras, Gassen, Böhm Bawerk, 等の主觀論者あり、更に是が折衷を試みんとする者に Dietzel, Marshall, Liefmann, 等の中間說あり現在に至つたのである。勿論斯く三種の說が相併んで說へられて居る譯ではない。客觀的價値論は Marx 以後殆ど沒落し去り現在に於ては略〻主觀派の勝利に歸して居ることは前述の如くである。

經濟學の一の科學として、少くとも科學らしき體裁を具へたのは Physiokrat 以後である。從つて獨立せる經濟價値論はこれ以後に現れたと云つてもいゝ。少くとも純粹な經濟理論の下に現れて居ると云へる。余は以下節を改めて Physiokrat 以後の價値論の大體の傾向を觀ひ、進んで現在の價値論に及ばんと欲するのである。

註一、高橋教授「ベルナルド、ダヴァンツァチの貨幣論」(「三田學會雜誌」第八卷第九號及第十號) 參照。

註二、Locke:— "Two Treatise on Government". Book II ch. v. Sec. 40

註三、前掲 Kaulla: —S. 76 ff.

高橋教授「ツヨシ、ロックの利子學說」（「三田學會雜誌」第十二卷第八號及第九號）參照。

註四、前掲 Kaulla:— S. 266 f.

註五、福田博士著「英國の學問としての經濟學殊に商國主義の始終」（「經濟學考證」第八編）參照。

註六、前掲 Kaulla:— S. 101, 104.

註七、同上 S. 268.

（未完）

獨逸社會主義の二傾向

阿部秀助

獨逸社會民主黨の歷史を通觀せし人には、其間二箇の傾向即ち只だ眞一文字に終極目的を實現せんとする傾向と所謂、現實其著に執着する傾向の存することを認むるを得るのである、先づ前者の傾向に就きて見るに同黨初期の歷史は最近「ラッドロフ」の云つた如く極めて理想的即ち終始目的に到達せんとする努力に充ちたもので、之れを當時の人物に求むる時は「カール、マルクス」とか、「ブリードリッヒ、エングルス」とか「アウグスト、ベーベル」の如き所謂社會主義上に於ける「ロマンチケル」である、更に之れが思想上の基礎をなせるものは千八百四十七年に於ける共產主義の宣言書及千八百九十一年に於ける「エルフルト」の社會民主黨宣言書である、殊に前書が當時の社會主義にとりて一個の信條となり、革命の烽火と見做された所以は、其實、當時に於ける獨逸の資本主義なるものが殆んど有名無實の狀態を呈してゐたことが之れが有力な源因である、現に之れが一面を證明するものは千八百四十八年の革命で、此革命たるや一般人民によりてなされたものと評し得るも、決して社會主義的無產者階級によつて齎らされたものではないのである、然るに以上の理想的態度を排して實際的意義を重んずる傾向は漸次同黨の內部に發生するに至り、殊に此點を最も鮮明に現はしたものは千八百九十年「エルフルト」の社會民主黨大會に於ける「フォルマル」の所論である、此所論の要旨は若、社會民主黨をして其主張を貫徹せしむる爲めには只だ單に理想の夢に憧憬することを止めて、實際上世を動かすに足る勢力を有することが必要であると云ふのである、而して此言說が「ベーベル」によりて批難攻擊せられたに不拘、爾來、此傾向は益々甚しきを加ひ「ベルンスタイン」の如き「ドクトル、ダヴィード」の如き熾んに、よりよき將來よりも、よりよき現在に着目するの必要を論ずるの士が輩出するに至つたのである、而して彼等が單に終始目的を夢みるを以て非なりとした有力な理由は「マルクス」等の主張が其後に發生せし幾多の經濟的事實と符合せぬと云ふ點である、即是ち等の有力な事實として指摘せられたものは（一）農業上に於ける小經營が自然的に廢滅すとなすは學理上、確論と稱するを得ざること、（二）勞働の機會を求むること能はざる勞働者の益々大なるに至る可しとの推論には疑問の餘地存するとともに資本家階級と無產者階級との間に存する階級戰が近世社會を二個の反目せる狀態に分たしむるに至る可しとの說も正當にあらざること、（三）所謂經濟的恐慌が其範圍を暫時弘くするに至ることは絕對的不可能にはあらざるも然かも幾多の理由よりして尙ほ疑問の餘地存すること、（四）生產的手段の私有が現時に於ける農民の富を奪掠する手段たりとの說は學理上、確乎たるものとして認定すること能はざること（五）社會主義の上に築かれたる社會的變化が一に勞働者階級の事業たりとの說も實際の事實と